

文学部 比較文化学科 総合問題

【注意】

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 試験時間は9時30分から11時10分まで(100分間)です。
3. この問題冊子は表紙以外に11ページあり、解答用紙は3枚あります。
4. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
5. 解答はすべて解答用紙の解答欄に記入してください。
6. 解答用紙の氏名欄を除き、受験者本人の特定につながるような氏名、住所、学校名等は記述しないでください。
7. 解答用紙を持ち出してはいけません。持ち出した場合、試験をすべて無効とします。
8. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

問題Ⅰ 次の英文を読んで、以下の設問に答えなさい。(80点)

著作権保護の観点から、公開していません。

著作権保護の観点から、公開していません。

(Adapted from Robin Newton, “Animals in the city,” *British Council LearnEnglish Teens*)

(注) *leopards : ヒョウ

*pest : 害獣

*baboons : ヒヒ

*rubbish bins : ゴミ箱

*electrocuted : 感電死させる

問1 下線部（1）を日本語に訳しなさい。（10点）

問2 下線部（2）を This policy の内容を具体的に明らかにしながら日本語に訳しなさい。（15点）

問3 下線部（3）を this の指す内容を具体的に明らかにしながら日本語に訳しなさい。（15点）

問4 下線部（4）を this strategy の内容を具体的に明らかにしながら日本語に訳しなさい。（15点）

問5 下線部（5）を日本語に訳しなさい。（10点）

問6 下線部（6）を日本語に訳しなさい。（15点）

問題II 次の日本語を読んで、下線部を英文に訳しなさい。(20点)

(1) 太宰治を好きになる人の多くが、「なぜこの人は僕の個人的なことを知っているのだろう？」というような感覚を持つらしい。それが本当かどうかは解らないが、少なくとも僕はそうだった。

そんな僕の感情と様々な偶然が呼応して、「自分の前世はもしや……」という思いに至り、有名な占い師に太宰治が生きていた時代に自分が誰であったかを占って貰った。

もしかすると、とんでもない運命を背負うことになるのではないかと中学生が考えそうな安易な発想を本気で信じていた。

薄暗い部屋の中で僕は占い師の言葉を待った。鼓動が速くなり緊張感が頂点に達した。全てを受け入れる準備が整った。

(2) その時、僕の心に風が吹き静寂が訪れた。

(せきしろ×又吉直樹『カキフライが無いなら来なかった』による。ただし、出題に際して原文の一部を改めた。)

(問題Ⅲ以降は 11 ページから始まります)

問題IV 以下の各設問に答えなさい。(四〇点)

問一 次の①～⑩の各傍線部のカタカナを漢字で書きなさい。(二点×一〇問＝二〇点)

- ① 今月の新刊図書をモウラして一覧表を作る。
- ② 急コウバイの坂道。
- ③ シセイの人々の声を政界に届ける。
- ④ 話題の映画に興味シンシンの様子。
- ⑤ 独裁者の本性がロテイする。
- ⑥ 上司のゲキリンに触れる。
- ⑦ ここ数年の間に新しい働き方がシントウした。
- ⑧ 高い場所の物を出すためキヤタツを用意する。
- ⑨ 論理がハタンしている。
- ⑩ 火山灰がタイセキした土壌。

問二 「くしくも」という言葉の意味がわかるように例文を作りなさい。(二〇点)

問三 「判官びいき」という慣用句の意味を説明しなさい。(二〇点)

メディアが発達し、人間関係がますます複雑化する中で、今日ほど、「コミュニケーション能力」が声高に叫ばれている時代もない。(B)「そのために、多くの人が、アイデンティティについて思い悩んでいる。私とは何か? 自分はこれからどう生きていくべきなのか?」

旧態依然とした発想では、問題は解決しない。現代人の実情にかな適う思想を、一から作ってゆくべき時である。

(平野啓一郎『私とは何か——「個人」から「分人」へ』による。ただし、出題に際して原文の一部を改めた。)

【注】

1 ペルソナ 元は古典劇の仮面を意味するラテン語。特に心理学で、社会的・表面的人格を指す言葉として用いられる。

2 フロイト ジークムント・フロイト(一八五六年～一九三九年)。オーストリアの精神科医で、精神分析学の創始者。

問一 傍線部(A)「個人という単位の大雑把さ」を、筆者はどのような点に感じているか。本文に即して一二〇字程度で説明しなさい。なお、解答文にアルファベットを含めるときは、小文字二文字を二マスに書くこと。(二〇点)

問二 傍線部(B)「そのために、多くの人が、アイデンティティについて思い悩んでいる」とあるが、それはなぜか。本文に即して一五〇字程度で説明しなさい。(四〇点)

外の対象や環境も分人化を促す要因となり得る。

一人の人間は、複数の分人のネットワークであり、そこには「本当の自分」という中心はない。

個人を整数の1とするなら、分人は、分数だとひとまずはイメージしてもらいたい。

私という人間は、対人関係ごとのいくつかの分人によって構成されている。そして、その人らしさ（個性）というものは、その複数の分人の構成比率によって決定される。

分人の構成比率が変われば、当然、個性も変わる。個性とは、決して唯一不変のものではない。そして、他者の存在なしには、決して生じないものである。

本書は、抽象的な人間一般についての理論書ではない。そうした体裁を整えようとすると、どうしてもモデルが先行して、私たちの実感に潜んでいる微妙なニュアンスを押し潰してしまう。そもそも、私は学者ではない。小説家だ。従って、語られる内容は、最初から最後まで、具体的な話ばかりである。無駄な複雑さを極力排して、可能な限り、率直に、シンプルに、わかりやすく議論を進めたい。

私たちは現在、どういう世界をどんなふうに生きていて、その現実をどう整理すれば、より生きやすくなるのか？

分人という用語は、その分析のための道具に過ぎない。

漠然と気づいていることを、改めて考えるためには、どうしても、言葉が必要である。「無意識の存在」を、フロイト（注）以前の人間がどんなに感じ取っていたとしても、話題とするためには、やはり適当な用語が与えられなければならない。

その意味では、本書の内容は、多くの人が既に知っていることである。ただ、明瞭に語られてこなかったというに過ぎない。議論のためには、どうしても足場が必要となる。本書の意義は、それをまずは整備することである。

人間には、一人一人、多様な個性がある。にも拘らず、相手がどんな人であろうと受け容れられる人格というのは、どういものだろう？ 聖人君子のような理想的な人格なのか、それとも、どんな消費者にもマッチする大量生産品のように、没个性的で、当たり障りのない人格なのか？ どちらでもなく、「オレはオレで通ってる」という人がいれば、周りが非常に寛大で、忍耐強く彼を受け容れているだけなのではないだろうか？

私はだから、人間は結局、他人の顔色を窺いながら、「本当の自分」と「表面的な自分」とを使い分けて生きていくしかない、と言いたいのではない。他者と共に生きるということは、無理強いされた「ニセモノの自分」を生きる、ということではない。それはあまりに寂しい考え方だ。

すべての間違いの元は、唯一無二の「本当の自分」という神話である。

そこで、こう考えてみよう。たった一つの「本当の自分」など存在しない。裏返して言うならば、対人関係ごとに見せる複数の顔が、すべて「本当の自分」である。

「個人 (individual)」とこの言葉の語源は、「分けられない」という意味だと冒頭で書いた。本書では、以上のような問題を考えるために、「分人 (dividual)」という新しい単位を導入する。否定の接頭辞 *di-* を取ってしまい、人間を「分けられる」存在と見なすのである。

分人とは、対人関係ごとの様々な自分のことである。恋人との分人、両親との分人、職場での分人、趣味の仲間との分人、……それらは、必ずしも同じではない。

分人は、相手との反復的なコミュニケーションを通じて、自分の中に形成されてゆく、パターンとしての人格である。必ずしも直接会う人だけでなく、ネットでのみ交流する人も含まれるし、小説や音楽といった芸術、自然の風景など、人間に

では、私たちの人格はどうだろう？ 体と同じように、分けることができない、唯一のものなのだろうか？ 当然じゃないか！と、これまでは考えられてきた。私は私、あなたはあなただ。体と同じように、その境界ははっきりしていて、色々なことを感じたり、考えたりしている自分は一つだ、と。

しかし、本当にそうだろうか？ それは、私たちの実感と合致しているだろうか？ 頭をまっさらにして、人間関係を観察していると、どうもそうじゃないんじゃないかという疑念が湧いてくる。

たとえば、会社で仕事をしているときと、家族と一緒にいるとき、私たちは同じ自分だろうか？ あるいは、高校時代の友人と久しぶりに飲みに行ったり、恋人と二人きりでイチャついたりしているとき、私たちの口調や表情、態度は、随分と違っているのではないか。

それはそうだ。人間には、色んな顔があるのだから。そう言われるかもしれない。

このことと、人格はただ一つ、という考え方とは、矛盾しているだろうか？ 恐らく多くの人は、矛盾しないと答えるだろう。人間は確かに、場の空気を読んで、表面的には色んな「仮面」をかぶり、「キャラ」を演じ、「ペルソナ^{（まじ）}」を使っている。けれども、その核となる「本当の自分」、つまり自我は一つだ。そこにこそ、一人の人間の本質があり、主体性があり、価値がある。……

こうした人間観は、非常に強固なものである。私たちは、ウラ・オモテがある人間を嫌うし、本音と建前を使い分けるのを日本人の悪習だと考える。八方美人というのは軽薄な人間の代表で、何よりも、「ありのままの自分」でいることこそが理想とされている。

どこに行っても誰と会ってもオレはオレ、ワタシはワタシ。それこそが、誠実な人間の生き方だ。——しかし、もう一度、実感と照らし合わせてほしい。そんなことは、果たして可能なのだろうか？ こちらはそれでもいいかもしれない。しかし、相手をさせられる方は、たまったものではない。面倒臭いヤツと、辟易^{（へきえき）}されるのがオチだ。

問題Ⅲ 次の文章は、平野啓一郎『私とは何か——「個人」から「分人」へ』の「まえがき」部分である。読んで、後の設問に答えなさい。(六〇点)

本書の目的は、人間の基本単位を考え直すことである。

「個人」から「分人」へ。

分人とは何か？ この新しい、個人よりも一回り小さな単位を導入するだけで、世界の見え方は一変する。むしろ問題は、(A) 個人という単位の大雑把さが、現代の私たちの生活には、最早対応しきれなくなっていることである。

日本語の「個人」とは、英語の インディバイジュアル individual の翻訳で、一般に広まったのは明治になってからである。しばらくは「一人」と訳されていた。

individual は、in + dividual という構成で、divide (分ける) という動詞に由来する dividual に、否定の接頭辞 in がついた単語である。individual の語源は、直訳するなら「不可分」、つまり、「(もうこれ以上) 分けられない」という意味であり、それが今日の「個人」という意味になるのは、ようやく近代に入ってからのことだった。

日本人は、この概念を西洋から輸入したわけだが、「個人」という日本語からは、「分けられない」という原義を感じ取りにくい。そんなふうを考えてみたことがなかったという人が大半だろう。しかし、私たち「個人」の抱える様々な問題は、実は、この見えなくなっている語源にこそ隠されている。

個人は、分けられない。これは、人間の身体を考えてみるならば、当たり前の話だ。一人の人間の体は、殺してバラバラにしない限り、分けることができない。そのたった一つの体——実体として存在している個人に、「森林太郎」だとか、「川端康成」といった名前がそれぞれついている。